

(3) システム関連

潮位監視システム並びに津波観測システムを使用して津波観測をしていた。田老総合事務所では防災関係機器を日常業務のなかで使用する習慣付けをしてきたため、職員が入れ替わっていても操作することができ、津波観測に生かすことができた。旧田老町では「防災に特化した仕組みや各種システムは、災害時には使ってもらえない。日常から使い慣れているシステムこそが災害時に役立つ。だから災害時を想像して日常のシステムを構築する。」という姿勢で各種のシステムを構築してきたそうである。しかし、これはシステムに限ったことではない。災害や防災となると、どこの市町村においても防災担当部署の仕事となるが、大規模災害時には全職員で対応することになる。また、日常業務での延長線上で復旧から復興に移行していくことになるので、例外なくどこの部署でも、その部署なりに防災や災害対応についてイメージしておくことが必要である。

表 2-2 事前対策と震災での実態（効果）に関する比較

テーマ	事前対策	震災での実態（効果）
防災教育・啓発	津波が防潮堤を乗り越えてくるシミュレーション映像を住民説明会等で公表。住民主体の防災マップづくりも実施。	津波の大きさを考えると、多くの方が避難した（担当者より）。ただし、185名の死者・行方不明者も出た。中には営業を継続して亡くなった方もいた。
庁舎並びに電源・通信機器の整備	庁舎は高いところに整備。大容量の自家発電機を整備。通信機器は移動系防災行政無線やトランシーバー等を整備。	庁舎本体は津波の浸水を免れる。停電するが、自家発電機により電灯やPCを使用することができた。情報収集は事前に整備していた通信機器を活用。これらにより、スムーズな情報収集・整理が可能になった。
システム関連	潮位監視システム並びに津波観測システムを整備。	潮位監視システムや津波観測システムを使って、津波の状況を監視した。

5. おわりに

今回、田老地区の防災を担ってきた担当者から話を伺った。報道で聞く田老地区は、「防潮堤」のイメージが強く、防潮堤の被害やそれに伴う避難行動が主であった。しかし、現実には防潮堤以外にも様々な津波対策が施され、いくつかの対策のおかげで対応がスムーズに進んだものもあったことがわかった。

ここで「防潮堤」について、昭和35年（1960年）チリ地震津波の際における興味深いエピソードを紹介したい。昭和35年のチリ地震津波では、旧田老町は津波の被害を受けなかった。そのため、当時は「防潮堤のおかげで助かった」といった報道がなされ、世界各地から田老の防潮堤を視察に来る方が多数いたそうである。しかし、チリ地震津波の際は、防潮堤に津波が到達していなかったのが実態であった（気象庁技術報告より）。そういう意味で、田老地区の津波対策はどうしても「防潮堤」だけに目がいってしまうが、他の対策についてもスポットを当てることも、今後の教訓として重要と考える。